

部室幽霊

外大ピンク

こっちとあっちでこんなちやうなんて
なんなんー。と脳内言語もひらがな仕様
になるほどの暑さ。うだうだとうだる暑
さ。夏の坂道を登る。某国立大学法人○大
学の正門でない側の坂道だ。どうしてこ
んなあついんにさらにはんしゃしちやい
そうなしろいいしなんー。とまだまだ愚
痴りながら目指すは涼しい(はず)の部室
だ。○大学ミステリー研究会の部室は最
上階の端にある。

鈴木的には21度がベスト!と、やっと
思考にカタカナと漢字が混じりだしたの
は坂道も終わりごろ、おまちかねの鰐さ

ん印の門から5分ほど歩いて右手に部室
のある建物が見えてきた頃だった。ここ
から必ず部室の窓をチエックする。よし、
ブラインドちゃんと閉めてあるある。直
射日光は避けねばねばやんな。あと5分
ほど歩けば涼しい部屋にたどり着けるは
ずだ。

鍵が開いているかどうか毎回ドキドキ
鈴木、あ、キが続いた、韻ふみふみ、と思
いながらドアの取っ手をおそるおそる下
ろすと、ラッキーなことになった。誰か
いるらしい。ホワイトボードの下に足が見
えないということはお隣さんサークルが
いるに違いない。入ってちらと見回して
みると書道部さんのところにミス研の椅
子に座っている人がいた。

あちゃ困った。今日はお隣さんに対抗！第2弾で筆ペンを持ってきたのである。まさか書道部の人がいる前で筆文字練習というわけにはいくまい。書道部さん方向に背を向け筆ペンを取り出し、さっと折り紙ペン立てに1本入れる。部室ノートを開く。テスト期間中のせいかさほど増えていない。全レスの必要も無いだろう。ホワイトボードの日付部分を書き直し、標語は『そんなに冷たいもん食べたらお腹こわす』と書き換えておく。適度に入室確認の正の字を増やしたり減らしたりしてみて、今度はリレー小説ノートを開いてみる。もはや終わる術をもたない、みたいな。閉じる。

暇だ。……誰も来ない。くるりと振り返

ってよくよく見てみると書道部さんは睡眠休憩中のようだった。チャンス！というわけで筆ペンをペン立てから取り出し、部室ノート横の白い紙を手前に引き寄せ。まずは名前の練習だ。鐘鈴木受愛慶。だめだ。画数のせいか字がごちゃごちゃとして読めたものではない。やっぱり筆ならではの良さを活かして書く言葉は選ぶものだ。そんなに冷たいもん食べたらお腹こわす。いいんじゃないだろうか。なかなか雰囲気が出ている。

などと一人悦に入っていたら、すすつと横に椅子が現れた。びくつと驚いて首を横に回すと寝ていたはずの書道部さんが椅子を返しに来ていた。

「あ、どうも」

「あ、いえいえ」

意味がわからない。会話になっていない。

「鈴木さんですか」

「あ、はい、そうなんです。ミス研の鈴木です。あ、お名前頂戴してもよろしいですかー?」

下手な字を見られてしまった以上、失うものはもう何も無い。言い過ぎか。ま、いいとして書道部の実力を目の当たりにしちゃってみようじゃないか、と筆ペンを差し出してしてみた。書道部さんは筆ペンを受け取ると、標語の横にこうおしたためになった。ほら、動詞選びがおかしいぞ、コンプレックスかこれは、とか深く気に

しない。

G森。……なぜ伏字なのか。ミス研への挑戦か何かだろうか。鈴木が悩んでいる間に書いた当の本人は部室から出ようとしている。

「あ、えっと、下のお名前は……」
「Cです」

だからなぜ伏せるのか。……ま、いっか。一瞬、O大ミス研毎週土曜2時からと言いつつ2時には数人しか集まっていな例会場所ありがたありがた喫茶店『百合園』へ行き、まああすたああ、と相談してみようかとも思った。が、このただでさえ暑い日にまっくろくろすけ出ておいでの部長がチョコ大盛り満喫中のところに出会ったが最後、なんてことは避けたい

のでやめておく。

涼しかった部屋を出て1階に下り、ガラス張りの中から外を見ているだけで、これからあの暑さの中へ戻るのだ、という決意が鈍ってくる。と、外に見覚えのある姿を発見した。

「うーさーぎー♪」

「その名前を大声で叫ばないでくれま
す?」

「さーつーきー、じゃ他にも振り向く人が
いるかもしれへんやんかー」

北海道民は大阪の暑さに耐えられない
らしく夏はいらつきがちのように見受け
られる。まだまだやねえ。そんなことは置
いておいて、さっき部室から持って出て

きた筆ペン落書き紙を取り出し宇田に見
せる。

「あのさあ、これって何て読むんだと思
う?」

「そんなに冷たいもん食べたらお腹こわ
す、ってこれ何なんですか。こっちが聞き
たいですよ」

「そっちじゃなくてこっち。森のほう。名
前の読み方」

「G森…が、ぎ、ぐ、げ、ご、郷森さんでし
ょうか」

「なのかなあ。んーまあいいや。テスト?」
「これから夜まで図書館にでも行こうか
と思っ…」

「あっそう、ぐっどらつくー」

が、ぎ、ぐ、げ、ご、で思い出した。今日

はゴールデンな金曜日だ。早く帰ってテレビ前にスタンバイして新本格ミステリドラマ『富豪探偵』を見ねば。珍妙なあだ名で呼び止められた挙句、わけのわからない質問をされ、しかも放って帰られる、というそれなりに可哀相な宇田を置いて鈴木は急いで帰った。

こういう日に限って野球が長びく。そして京阪神は負けている。こういう時、なにがティガーや！と思う関西人は鈴木一人ではないはずだ。『富豪探偵』がなかなか始まらないことにいらいらイリテートしていたら携帯電話がぶるぶるいう。

「……」

「……あ、あの、鈴木さん？」

「何？」

「今、大学から帰るところなんですけど、部室がぼうっと青白く光ってるんですよ」

「で？」

「今もうセキュリティか何かで閉まってるはずじゃないですか。誰もいないですよね」

「じゃない？」

「どういうことでしょう」

「何が？」

「いやだから誰もいないはずの部室が青白く光ってるんですよ。おかしいでしょう？」

「そんなウケるほどではない。関西人をなめてかかってはいけない」

「そういうことじゃなくて、ほら、もし

かして幽霊とか何かそんなんだりしてと思つて……」

「幽霊も新しもん好きなんやね」

「ああやっぱりそうなんでしょう。古い建物から移ってきたとか」

「ちよつと暑いから引越しちゃおう、って？勉強のし過ぎか暑さのせいかな知らないけど寝ぼけたこと言つてないで良い子はお家に帰りなさい」

「でもだつて現に光ってるんですよ。こういうことすぐに教えとかないと鈴木さん怒るでしょう？それにそっちだつて冷たいものを食べたらどうとか変なこと言つてたじゃないですか」

「無関係。今どこにいるって？」

「あ、えつと自転車で通りにくい所の近く、

広くなつてるとこ辺りです」

「じゃもうちよつと先に進んで『神隠』か何か言うアパートがあったでしょ、原チャの上でよく猫が寝てる。そこら辺まで行つて」

「あ、はい来ましたけど」

「で、もっかい見てみる」

「あ、なるほどさっきより部屋が見えやすいだらうつてことですね……」

「どう？」

「えつと……光ってません」

「……」

「あの……」

「帰つてよし」

「寝言みたいな電話はかかってくるわ、イガーは結局負けるわ、いいことなしだ。」

きつとここから『富豪探偵』で運が上向いてくると信じてテレビに向き直る。

ますますもってついてない。翌朝、鈴木はテレビ前のソファで頼杖をつきながら呟く。延長した試合のせいでドラマも延びて、しかもそれを観ている途中で眠ってしまった。こうなったらサークルで誰かに借りるのが良いだろう。昨日誰か録ってるといいけど。ひえひえ部室を目標して家を出る。

チャレンジチャレンジ部室ドア開け。かもーん。そつと扉を開く。と。

「うそつきっ」

つやつや黒いショートヘアのよく似合った可愛い女の子が、白いワンピースの

裾をひらひらさせながら部室の外へと駆け出て行った。大きめのくるくる眼のふちにうるうる涙をためていたのが印象に残った。

土曜日の朝から何が起きているのだろう、と思いつながら部室の奥へ進む。そこにいたのは昨日のG森・書道部さんだった。

「おはようございます」

「おはよーございますー」

「ここで今、何も見ませんでした、ちっとも気づきませんでした、という振りもおかしいだろう、という正当っぽい理由と好奇心とで訊ねてみることにした。

「あの、どうなさったんですか」

「それが……」

あーでこーでそーでどーなったという

説明を受ける。拝聴する。聞き終えて鈴木は結論を述べる。

「なるほど。分かりました。全てはあなた
のせいですね」

「あ、ま、いや、それはそうなんですけど」
「家に行ってみたら明かりが点いていな
かったから、いつ帰ってくるのだろうと
思いながら待つ彼女さんの気持ちはまあ
分からないですけどまあそれはそれとし
て、なかなか帰って来なくて心配しちや
うのは分からなくもないっていうかまあ
一応理解可能なことです。そのうち連絡
があるかもしれないと思って帰ったのに
連絡が来なくて焦っちゃうのもまあいい
としましょう。彼女さんがそんな状態に

あるだなんてあなたには分からなかった、
っていうのは全くもって正しいですね。
でもそんな状態だろうがどんな状態だろ
うがあなたここに泊まったって本当なん
ですか?!」

「テレビもあるし冷蔵庫もあるし椅子も
あるし一晩ぐらい大丈夫そうだと思っ
たもので」

「テレビはテレ研さんのものだし椅子は
ミス研のを並べてますし、だいたいその
枕にしたと思われるものは格闘技部さ
んのじゃないんですか」

「はい、全部うまく調達できました」

「いや、そうじゃなくて…ま、いいや。そ
れで昨夜ここでテレビを見たりしてた
んですね?」

「やっぱり野球は見逃せませんかからね」

宇田が見たのはそのテレビの光がブラインド越しに漏れたものに違いない。幽霊だと騒ぐ宇田も宇田だが、部屋に泊まってみようというG森さんもG森さんだ。「パソコンも使えたんで絵を描いたりもしちゃいましたよ」

「さすがCGさん、ってなんやかなあ」

「CGってどういふことですか?」

「Computer Graphicsですよ」

「さっき、さん付けしてませんでした?」

「えっとお名前たしかG森Cさんでしたよね」

パソコンを立ち上げて絵を見せてくれようとしていたらしいG森さんが、とても驚いたような表情を見せた次にはすぐ

笑い出した。

「ちょっと、何なんですか?何か私、変ですか?!」

「いえ、ちょっと鉛筆と紙を借りますね。僕の名前を硬筆で書きますから」

さらさらと書かれたその文字を見てみたら…そこには千森椎とあった。

「ち、もり、しい?」

「そう、だからイニシャルはダブルCです」

「ああああああ、なあんだあ。ミス研だからと思って伏字で挑戦されたのかと思ってましたー」

「まあ冷たいものでも食べて暑気払いし気分転換しませんか?その冷蔵庫に

入れてあるんです」

「いただきますっ」

「アイスとシャーベットがあるんですけど……鈴木さんはもちろんアイスですよね？」

「あの、それはどうも挑戦としか受け取れないんですけど。パンチしていいですか」「食べてからにしませんか？」

まだ笑いが収まらないらしい千森さんから洪々アイスを受け取る。アイスはそりゃ好きだけど。

「千森さん、私がパンチしてもパンチしかえさなideくさいね」

「しませんよ」

「千森さんがパンチしたら骨が粉々になっちゃうそうですもん」

「……ああ、それ仕返しですか」

筆ペンは上手く使えないし、夏は暑いし、宇田は幽霊がいるとか言うし、野球は負けるし、ドラマは見逃しちゃうし、女の子は泣いちゃうし、イニシャルはCGじゃなかったけど、今日は『百合園』に一番乗りしてマスターにひとしきり昨日今日のことについて喋った後、人が集まりだしたら『富豪探偵』を誰か録ってないかみんなに訊いてみて、例会が始まってても宇田には部室の幽霊の真相は教えてやらないんだ！好きなアイスを食べながらそう鈴木は心に誓った。

あとがき、もしくはやぶへび

マルクス短編の百合園や○大ミス研とい

う設定を借りて掌編を書いてみました。これを読んだからといって、部室に泊まるなんて試みたりしないでください。このシリーズ(?!) 続くと面白いかも、どうだろう、それでもないかも、と思いつつ、今から『富豪刑事』を観る次第です。

書庫探索

外大ピンク

Cは坂を登るバスに乗り、某国立大学法人O大学と近々統合予定のOG大学へ向かう。大学内のバス停でKTと待ち合わせている。KTというのはもちろんあだ名で、本人が小学校でローマ字を習った時

に、イニシャルをカリグラフィでこう書いたことから名づけられた。ちなみに、Cは自分のイニシャルをCCと書く。ガールズではないが漫オコンビでもない。話が逸れた。KTの話に戻ろう。KTは土曜日生まれである。KTは目下、OG大学の書庫でバイト中だ。KT曰く、それは天職であり、古書とイマジネーションの宝庫らしい。幻想か妄想でないとはCには否定できないが。

そんなことをつらつらと誰かに向かつて脳内で語りかけている内に、バスは停車する。ここが、KTが「統合したらぜひ私のアイディアどおりに山本山のような名前に替えてほしい」と言って譲らない、「大学前」バス停である。「大学前」バス停

が「大学内」にあることが既に何かのユーモアのようでもあるので、統合したらそんな名前に本当に変わってしまうかもしれないとCは思う。

「エース・トムは元気かい？」

「そちらこそどうなの？今はダイアナかしら、カミラかしら？」

ちよつと元ネタが分かりづらいかもしれないが、これで通じ合うのがCとKTの仲である。どんな仲間なんて野暮で無料な邪推は無用だ。Cはそれほど広くないキャンパス内をKTに案内してもらおう。案内と言ったって教室が並んでいるだけなのだから、話はおかしな方向へと飛んでいく。これも極めて正常で健康で通常の

流れだ。

「ほら、あそこまでモノレールが来るのよ」

「あの橋げただね」

「私、公共の交通機関ではモノレールが一番好き。運賃が高くて、いつも使う移動範囲になくって、でも、あのボディと動きがたまらない」

「前は、はんきう電車のことが好きだって言っただけじゃなかった？」

「電車の中では、あのアズキ色の車両、抹茶色のシートが素敵だし、移動範囲にぴたりだし、はんきう電車が一番なの」

とか、

「このエレベータはね、夜に乗っちゃいけ

ないんだって」

「うちの大学の部室には幽霊が出るらしいよ」

「さしずめ、あなたが書で何かを招き寄せたのでしょう?」

「当たらずとも遠からず」

「でね、エレベーターが行きたい階まで行かずに途中で止まって、扉が開くの」

「話に戻ったね」

「すると、たればんだを抱いた少女が乗ってくるんですって」

「どれくらいの大きさの?」

「その子に会うと、アウトらしいわ。エレベーターから降りられないの」

「随分涼しい話だね」

とかだ。

そんな話をしながら棟から棟へと歩き、今度は中庭へ向かった。中庭の時計を正面に立つと、右手から正面にかけて、さきほど渡り歩いた棟が建つ。左手がKTお気に入りの書庫のある図書館だ。背後には、墓石階段という名の、なんとも物騒ながらも有難そうな石でできているという噂のある階段がある。それを下りれば生協会館へ行ける。もちろんKTの案内のメインは図書館だ。

「こちらが我がOG大学付属図書館です。ここがメインエントランス、こちらの廊下の右手が自習室で、無線LANに繋ぐことが可能です。お手洗いは左手にござい

ます。図書館入り口へは、こちら正面の階段を上がりました2階に「ございます」

KTはのりのりだ。階段の横に倉庫の入り口のように思えるドアがある。Cは訊ねる。

「これは？」

「そちらは事務室です。図書の受入、整理などを担当しております。総務、館長、事務長もおります」

2階へ上がる。KTは学生証でバーを通り、Cは入館許可書にサインする。カウンター奥にロッカーがあった。Cはまた訊ねる。

「あれは？」

「そちらは書庫へ入る際の荷物置き場で

す。さ、上へ行きましょう」

上がると、開架はその階でおしまいだった。O大学図書館と比べるととても小さく思える。そう言うくとKTはこう応えた。

「OG大学付属図書館の特色は、様々な言語の図書を所蔵しているという点にあるでしょう。それらが書庫に入っているわけで、私はそれに毎日触れているわけで、でもそれをCが見ても何が何やらなわけで、ええ、つまり共通理解部分が狭いわけね。ではでは仕方ありません。生協でお茶にしましょう」

CはKTと違って、専攻外分野の本をあれこれ読むという性癖は無い。CはO大学

図書館でKTが建築学の本に熱心に見入っているのに出くわしたいそう驚いたことがある。ただそれもKTに言わせれば専攻と無関係でもないらしい。

たったひとつの食堂で、CはKTの「どれでもどうぞ」という声に甘えて、トルコ人をわざわざ呼んでフェアをしているところでアイスを2つ頼んだ。どんどどどるどる、どんどどどるどる、と混ぜて、まーと伸ばすあれだ。あれだ、と言われても困ろうが。どんどどるどる、まーとやりながらKTの書庫バイト話を聞く。

「リフトでブックトラックを上げ下げするの。人間は乗ってはいけないんですって。生きていたらダメなのかしら」

「死体は荷物かどうかという判断なら君に任せるよ」

「事務室でラベルを作って貼って、ブックトラックに載せて、事務室を出て荷解き室を通って書庫へ入って、リフトに入れるのよ」

「扉は？」

「事務室と荷解き室の間に1つ、荷解き室と書庫の間に1つ。あ、いえ、2つね」

「1つと2つって間違えるかな」

「いえね、リフトが書庫と荷解き室の間にあって、扉がどちら側にもついているの」「ふうん」

「事務室と荷解き室は高さが違うの。で、ブックトラックが通れるように坂が作ってあるわ。リフトに荷物を載せるときは

ね、扉をしっかりと閉めて、荷物を届けた
い階のボタンを押すの」

「扉を開け閉めするのにもボタンがある
と良いね」

「どこかの階で扉が開きっぱなしだと、赤
いランプが灯って、扉が開かないのよ。全
部の扉のうち1度に1つしか開かないよ
うになっているのね」

「閉め忘れがあると面倒だね」

「本当にそうなのよ。この前は1階から3
階まで3フロア分も階段上っちゃった」

「え？3階までだよね」

「うん、中2階っていうのがあるの。2階
は窓が豊富なんだけど中2階はそうでも
ないのよ。除湿機もすぐ満水になっちゃ
うし。空気の為のダクトがむきだしのコ

ンクリート壁をうねうねしているのって
面白いわよ」

「あ、うちっぱなしなの？」

「え、うーん、どうかしら」

「毎日通ってるよね」

「このアイス、もうちょっと溶かした方が
伸びるかも」

どうしてこうKTの話は要領を得ない
のだろうか。Cの方が、KTの話から要点
を抜き出す要領を心得てきた次第だ。

「あのね、開架も書庫も夏休みは17時ま
でなの。でもね、書庫は閉館時間の音楽が
届かないのね。バイトしている私達は腕
時計をちらちら見るから構わないのだけ

れど。熱心な卒論資料探し中の学生さんなんかは、本当に熱心なのね。で、閉館時間を過ぎてしまつて。この学生さんも困るでしょう？でもね、ちゃんと18時ごろには図書館を出ていたの。さて、どうしてでしょう？」

「職員さんがライトを消して鍵を掛ける時に、声をかけたから」

「いいえ、気づかなかつたの」

「それ、ウミガメ？」

「ええ、Yes/No クエスチョンは受け付けます」

「その学生が出たのは鍵が掛けられてから？」

「ええ」

「全ての扉に？」

「いいえ」

「え？どうして？どこか鍵を掛け忘れたの？」

「Whyクエスチョンは受け付けていないわ。後半の答えは、いいえよ」

「窓は開いていた？」

「いいえ。窓は開かないようになっていたの」

無関係なことには追加情報もくれるらしい。そんなクイズだっただろうか。つまり水平思考を要求するようなクイズではないのかもしれない。

「ダクトは通れる？」

「まさか」

Cのアイスは先ほどからずっと、どるどるどるどる、となっていて、なかなか

か、まーにならない。

「あ、そうか、鍵をかけられない扉があったんだ」

「ええ、そうよそうよ」

質問していないのに答えるKT。核心に近づいた証拠だ。

「つまり1階のリフトを通って、書庫から荷解き室に行った。荷解き室と事務室の間はブックトラックの坂があるということだとだし扉は開いているね」

「そもそもその扉は鍵をかける必要はないし」

「職員さんは閉館後も働いているだろうから、事務室へ行って事情を話せばいい。そうすればメインエントランスへ出して

くれる」

「そう、その通り」

Cはやっと、アイスをまーした。KTはにっこりとアイスを食べる。Cが言う。

「ああ、そうか。試したね？君が好きそう。君はすみっこだとか狭いところが好きだったね」

「うーん、後半はYesよ」

「協力者は誰かな」

「私」

「……自分の身は危険にさらさないということか」

「私がしなくていいことは私はしない主義よ」

犠牲者は誰かな、とCは考えながら、K

Tのバイト仲間の未来に幸あれと願った。

あとがき、もしくはやぶへび

マルクス短編の百合園やO大ミス研という設定を借りて掌編を書いてみたのの、続きを書いてみました。これを読んだからといって、リフトを通るだなんて試みたりしないでください。書庫は楽しいよね、と思いつつ、今から『リサイクルされた市民』を読む次第です。

両替書店

外大ピンク

桂は、大野原へ向けて坂を下っていた。

OG大学からバイト先の御得意書店まで

は歩いて30分程かかるのだが、散歩好きの桂にとっては坂も距離も何でもない。弟に言わせれば、何でもない桂の方がどうかしているらしいが。そんなことはさておき。

最近、桂は1週間の内のある曜日になり期待している。それは自分の誕生日である土曜日だ。弟のついで知り合った友達の愛ちゃんが、摩訶不思議な集まりに参加する曜日でもあるが、それは無関係。なぜなら、土曜日が特別なのはバイト先でコインと格闘せねばならない曜日だからだ。

桂は数が苦手だ。1、2、までは良い。それ以上は「いっぱい」とか「たくさん」という言葉で済ませたいし、計算で言えば、1

桁と1桁を足して2桁になるのが許せない。そんな真情だ。にも関わらず、最近では毎週土曜日の夕方にこんなことが起きているのだ。バイト先へ着くまでにはまだあと半分ほどある。暇だし、誰へのサービスかは分からないが、愛ちゃんにしたような説明を再度してみよう。

その客はドアが開くと、本には目もくれず、まっしぐらにレジへ向かってくる。「いらっしやいませ」

愛ちゃんは自分のスマイルに100円の値段をつけているらしいが、桂はそういうのもバイト代に含まれているのだろうか。と信じて、笑顔で挨拶している。

「せ、千円札に両替してくださいっ」

客は、握り締めていた手をレジの小銭受けの上で開く。と、ばらばらじゃらじゃらとまあ見事に50円玉ばかりが受け皿へ落ちる。桂は、その50円玉を列に並べていく。

「1、2、……10ぐらい、と。1、2……」

桂がそんなふうにな（適当に）数えている間、客は落ち着かない様子で後ろ、今入ってきたドアの方を見遣ったりしている。

「はい、ちょうど1000円です」

と桂が千円札を手渡すや否や、客は礼も言わずに、まっすぐドアへ向かい出て行く。

これが最近の土曜日夕方のパターンだ。

……というようなことを説明した。

「それ、本当に本当に毎週来んの？」

愛ちゃんが訊く。

「本当に本当に毎週来るの」

桂が答える。

「いっつもいっつも、50円玉20枚なん？」

「いっつもいっつも、そうなの」

「それにしても桂、よく千円札1枚分って分かったね」

「うん、最初は電卓使っちゃった」

「……………」

「……………」

「で、そのお客さんってどんな人？」

「んっとね、ちっとも本を見ないからね、分からないの」

「別に本の嗜好から性格を当てようってわけやなくて、性別、年齢、住所、趣味に、職業、あとあと年収、家柄、みたいなことやん」

「そう、男性。年齢、住所、ともに不詳。本の趣味は不明で、土曜夕方に私服の日常生活。所持金は最低で1000円あり。日本人ぽそう」

「ロマンズの神様のお見合いかい！ってつっこむところやってんけど。ま、いっか。うーん、まだいまいちつかみきれん。私服ってどんな？」

「あのね、制服じゃなかったからね、私服なの。私服でもなかったしスーツでもなかったの。そう、だから、私服」

「うん、つまり総合するに、うさぎでも送

り込んで見張らせた方が人物像ははっきりするってことやね」

「でも、土曜夕方は百合園じゃなかったっけ？うさぎさんは毎回参加して会計の仕事をしてるのでしよう？」

「誰かさんと違って電卓を使わなくても計算できるからね」

「あ、そういえば部長さんのチョコ大盛りはその後いかが？」

「話をそらすなー。じゃ、ま、うさぎに話してみるだけみるわ」

「そうして、で、何か分かったら教えて。気になるもの」

「毎週50円玉20枚を両替するだけって不思議だもんね」

「摩訶不思議な皆さんがどんな風に考え

るのか本当楽しみ」

「そっちかい」

桂は人を覚えるのが苦手だ。名前はまづ本名では覚えられない。愛ちゃんも桂も人を本名以外で呼ぶことが多いが、わざとあだ名で覚えようとする愛ちゃんと事情が異なる。愛ちゃんは人を服装や小物の色使いなどで覚えるが、桂はその人が読む本や話題、行動、などなど趣味嗜好の表れる部分で覚える。よって2人も顔と名前が一致しない。顔と名前はしっかり覚えても、その人の中身にはさほど興味のない弟と相容れない点がこれだ。

そんなことを思いながらバイト先へ到着。支度して（といってもエプロンを身につけるぐらいだが）ロッカーに鍵をかける前に、ふと携帯を見るとメールが2通来ていた。返信が遅い、とよく怒られるのだが、考え事をしていてもメールの着信に気付けるだなんて、みんなすごい、と感心している桂である。

1通は弟からだった。

「宇田から50円玉20枚は新しいタイプの怪談なのかと訊かれた 鈴木さんが宇田に話したらしい 鈴木さんに話したのは君だね？」

桂↓愛ちゃん↓うさぎさん↓桂、という連絡の以前に、桂↓愛ちゃん↓うさぎさん↓弟、の連絡網があったということの

ようだ。世間は狭い。もう1通はうさぎさんからだった。

「すみません。土曜夕方にレジ前で見張るなんて無理です。ってかそもそも、その客は同一人物なんですか？怪しいなあ」

桂の人物認識をうさぎが怪しがるのも無理はないが、他の店員も「また来たね」と後で言っているの、同じ人だと判断して構わないだろう。時間なので、そろそろレジへ向かう。

お仕事おしまい。今日は女性誌の発売日だったので、あれこれを比較検討していく女性客が多かったように思う。（人はそれを立ち読みと呼ぶ）。桂の統計では上から3冊目を選んで買っていく人が一番

多い。桂の数字は当てにならない、という人は信用しなくても構わない。自由だ。携帯を見ると、今度は愛ちゃんからメールが届いていた。

「ちゃお☆来る土曜日午前、鈴木が大野原入り！！桂にペンダントをプレゼントなのだ♪特製だよ。おっ楽しみにい〜！！」

特製……？桂は訝りながらも、愛たっぷりのシルバーアクセだよ、と言われる、に1円玉貯金の半分の半分を賭けておくことにした。

さて、土曜の朝。愛ちゃんが特製を持って大野原交差点へやって来た。待ち合わせ

せの、お肉の美味しいお店で、桂はそれを受け取った。

「けっこう大きいのね」

「まあまあ聞いて驚きなさいって。その真ん中のは実は実はレンズなのだ！」

「ん？コンタクトの替え用？私、眼鏡だよ」

「なんでやねん！ちゃうって。か・め・ら。小型カメラが内蔵されているのだよ。なんとなんとビデオ機能が付いてて動画を録ることが可能であるからして、今日の夕方、1000円のお客さんが来たら、ペンダント裏のボタンを押せば良いからね。2分弱録画できるから」

「うーん、犯罪の香り。いけない予感」

「イヤ？」

「ううん、面白そう。ありがとう。やってみるね。愛ちゃんのお手製には驚かされるわ」

「どういたしましてー。ま、そういうの作るのはお茶の水博士顔負けだから、任せて。最近もさあ部長になんか真っ黒の細いチエーンアクセを頼まれたわけ」

「あ、あのチヨコの人」

「そうそう、真っ黒くろすけの人。なんかその兄の萌えヲタ先輩が欲しがってるとかで。私はアクセ職人か！と心の中でつつこみながら作りましたとさ」

「うん、OBさんね。チヨコでアクセ作ると喜ばれるかもね」

「わあお。それは思いつかなかった。今度やってみんとて」

正午を過ぎ、愛ちゃんは百合園へ向かった。桂はペンダントを胸に出勤。以前、勧められたから淡い桃色のネイルを塗っていたのに、勧めた本人が「あれ？今日デート？」などと訊いてきたことがあった。案の定、今日はその人物に「あれ？それは愛の証？」などと言われた。その人物はまたの名を店長と言ったりするのだが、風紀に厳しくなくても良いのだろうか、と悩むバイトの桂である。

人気作家の新刊がとんとたたたと売れていく中、その客は来た。桂は、愛のスイッチを押す。ときゅん。

「あの、千円札に、両替で」

「かしこまりました」

胸元のレンズを意識しながら両替を行う。今日も千円札を受け取ると、ばたばたと出て行く客。と、爪を黒く塗った店長がやって来た。

「あ、今日はもういいや。おしまいおしまい。その代わり明日の朝、入ってね」

「あ、はい。分かりました。お疲れさまです」

新刊を売る間、じっと読みたいのを我慢していたのが伝わっていたらしい。これでやっと新刊が読める！いそいそと帰り支度をする。

じつとぐぐつと新刊の世界に耽っていると、インターフォンが鳴った。玄関前に

照明が無いので、大抵の人は、インターフォンにがちがちの透明カプセルが被せられていてベルが押せない、などは、そう気付けるものではない。ということでは、それを知っている誰かが来て外して押したわけだ。仕方が無いので通話モードに切り替える。

「はい」

「椎。鈴木さんと宇多も来てる。開けて」

ますますもって仕方が無いので、鍵を開けた。

「夜遅くにごめんねー。うさぎのせいで読書会が長引いちゃったりしたもんだから」

「違いますよ。その後食べに行った先で鈴

木さんがなかなかメニュー選ばないから
でしよう」

「で、店で会ったんだ。飲み物は買ってき
た。ビデオ繋ぐよ」

どういうことだろう、とまだ新刊の世
界から抜け切らない桂がぼんやり思っ
ていると、愛ちゃんがペンダントを外し
てくれた。そうだ、つけっぱなしだった。

「これが問題のペンダントですね」
と、うさぎさん。

「そう、これが問題の動画が収められてい
る素敵なペンダントよ」

と、愛ちゃん。

「あ、ビデオ繋げましたけど」

と、弟。

そんなわけで、五十円玉二十枚ビデオ

鑑賞の夜と相成った。カラーではないが、
思ったより画像は荒くない。動画は客が
ドアを入ってくるところから始まってい
た。

「ん？このお客さん、五十円玉を時代劇の
人みたいに紐でつなげてますね」

「……あ……そのチェーン……」

「あ、この人」

「え？何なに？どうしたの？」

分かりづらいかもしれないが、発言は
順に、うさぎさん、愛ちゃん、弟、桂だ。

「このチェーン、鈴木お手製だし！」

「君、覚えてない？君は前に一度、百合園
にお邪魔した時に会ったけど。ミス研の

OBさんで、部長のお兄さん、じゃなかったかな」

「そうですね、この細いチエーンにも顔にも見覚えがあります」

愛ちゃん、弟、うさぎさんが口々に言う。

「そう言えばあの人、ゲーセンで両替してもあまり使わなかったな」

「会計の時によく両替してくれると思ったら50円玉限定だったんですね」

「……………眼鏡っ娘。。。」

弟、うさぎさん、愛ちゃんがそれぞれ勝手に喋る。

「えっと、あの、つまりどういうこと？」

弟はもう興味がなくなったらしくビデオを外し始め、愛ちゃんはアイスを食べ

始めている。桂の質問には、うさぎさんが答えてくれた。

「我らがミス研のOBであり、部長のお兄さんはですね、最近50円玉を集めてたんです。で、鈴木さんに作ってもらった黒くて細いチエーンアクセにその集めた50円玉をつないでたんでしょう。あと一つだけ確かめたいんですけど、その本のカバーはバイト先のものですか？」

「ええ、うちの御得意書店」

「部長の苗字はですね、得井って言うんですよ。もしかしたら部長と部長のお兄さんと御得意書店の人ってみんな親戚なんじゃないですかね」

弟が突然質問を割り込ませた。

「あのさ、君のレジっていつ小銭を補充する？」

「それはね、少なくなってきたら、100円玉と10円玉と1円玉はビニール筒のレジの中にあってそれを出すの。500円玉は私が両替して入れるから補充しなくてもよくなって、50円玉は……あれ、どうしてるんだろう」

「そう」

弟の質問は終わったらしい。弟の意図を汲み取ったらしいいうさぎさんがまとめる。

「うーん、そういう視点がありましたか。もしかしたら五十円玉の補充をかってでたのかもしれないね」

「萌えヲタ真っ黒くろすけ先輩がね。眼鏡っ娘ラブの奥手さんね。小銭が十分集まった例会前にね。書店の小銭補充ね。はああああ、そおおう」

と、愛ちゃんが割って入る。

「確かではありませんけど、可能性としてはあるでしょう。しょころとか何とかいう人に萌えてるらしいですし」

「あ、そういえば店長、チョコが好き……」

桂がそう呟く。弟が、みふあそーみーどーれどどーしーしーと鼻歌を歌いながらテレビ番組を見始め、愛ちゃんはもうアイスを食べ終わりそうで、うさぎさんは携帯メールを熱心に打っているらしい。桂は読書に戻ることにした。

あとがき、もしくはやぶへび

マルクス短編の百合園や○大ミス研という設定を借りて掌編を書いてみたの、続きの、続きを書いてみました。これを読んだからといって、録画ペンダント作成を依頼するだなんて試みたりしないでください。今までのネタを全て繋げたことに満足しつつ、今から『月刊言語』を読む次第です。